



私立大学における入試手続き率向上に関する研究

大 村 雄 史

概要 これまでの筆者の研究で、全国の大学志望者数が減少しても成績上位者の「手続き率」を上げることが出来れば、入学生学力レベルの低下を心配する必要はなく、場合によっては入学生学力レベルのアップが十分可能であるということが数値的に明らかになった。このことから、成績上位者の手続き率を上げるための対策が必要となる。本研究では成績上位者の入学手続き率向上のための分析を行う。

キーワード 大学経営, 大学教育, 問題解決の手順, KJ 法, システム分析, 手続き率, 入学試験, 経営科学

原稿受理日 2007年8月21日

Abstract According to my study, even if the number of applicants for universities in the country decreases, if Admission Procedure Rates of high-ranking students increase, it is clear, numerically, that there is no need to worry about a decrease in scholastic ability levels of new university students. Although it depends on the Admission Procedure Rate, scholastic ability levels of new university students might increase. Results show that measures to increase the Admission Procedure Rates of high-ranking students are necessary. In this study, the problem of improvement in Admission Procedure Rates is discussed.

Key words university management, university education, problem solving procedure, KJ method, systems analysis, admission procedure Rate, entrance examination, Management Science

1. は じ め に

これまでの筆者の研究（私立大学入試における合格最低点決定問題〔1〕，私立大学入試における合格最低点決定モデルの感度分析〔2〕，私立大学入試における合格最低点決定モデルのリスク分析〔3〕）で，全国の大学志望者数が減少したとしても成績上位者の「手続き率」を上げることが出来れば，入学生の学力レベル低下を心配する必要は減少し，場合によってはアップが十分可能であるということが数値的に明らかになった。そして学力レベルがアップできれば，その結果がさらに次年度の手続き率アップに繋がるというプラスのフィードバックを期待できる。このことから，成績上位者の手続き率を底上げするための対策が必要となる。本研究では成績上位者の入学手続き率向上のための分析を行う。

2. 問 題 の 背 景

ここで述べる問題は，多くの私立大学に普遍的に存在する問題である。大学にはいろいろのレベルがある。日本のトップクラスの大学では，十分世界に通用する内容の教育・研究がされており，一部のマスコミがセンセーショナルに報道するようなひどいことはなく，真面目に勉学に励んでいる学生の割合が多いことは言うまでもない。また，それに続く大学も，勉学意欲のある学生が入学していれば，学生のレベルに応じて卒業時には適切なレベルまで上げる事が出来，そう大きな問題はないと考えられる。問題は勉学意欲がないにもかかわらず入学してくる学生である。勉学意欲のない学生は当然入試の成績もあまり良くはないが，大学志望者数と大学定員の関係から，入学してしまう可能性が高まっている。そのような学生の割合は，いわゆる大学のレベルが下がるに従って増加する。多くの大学はそのような事にならないようにいろいろ知恵を絞っている。

入学試験において，成績上位者の手続き率をどのようにすれば上げる事が出来るかは多くの私立大学にとって非常に重要な問題である。なぜ重要かと言えば，成績上位者は一般的に言って勉学意欲があるので，大学においては本来の意味で大学らしい，学生の意欲に応じた高度な教育が可能であるが，入学時に成績がもう一つの学生は，多くの場合勉学意欲に乏しく，大学によっては本来の大学教育は難しくなっている場合も多い。このように入学時の成績と勉学意欲は関連性が高いと認識されている。

大学は志望して入るものであり，志望しているにもかかわらず勉学意欲がないのは本来

はあり得ないはずである。しかし、現実にはそうっており、その原因は難関大学を除いて大学の門が広くなりすぎたことにある。これは教育行政の問題であるが、今回は議論しない。

入学試験において、各大学が成績上位者の手続き率を出来るだけ上げようということは、入学者中の「勉強意欲の乏しい学生の割合」を出来るだけ低くしようということであり、その割合が高くなるほど教育は困難となることが予想される。

そこで本研究では、「成績上位者の手続き率を上げるためにはどのような戦略が考えられるか」について分析する。

3. 入学する大学を決定する要因

3.1 大学の位置づけにより変わる要因と志望順位を上げる意味

複数の大学に合格した場合、どの大学に入学するかを決める要因は、合格した大学の中に最初考えていた志望大学が入っていればその順番となることがほとんどであろう。従って、各大学は、志望順位の上位に自分の大学がくるようにするにはどうすべきかということに知恵を絞ることになる。

それでは志望順位を上げるとはどういう事であろうか。この答を得るにはこれを考える大学（学部）の性格を明確にする必要がある。どの大学も同じと言うことはあり得ない。例えば、トップレベルの大学では、研究内容や有名な教員の存在や研究のための設備や環境がどれだけ整っているかということが非常に大きな要因となるだろうし、どのような人材を輩出しているかも大きな要因である。またあるいは、〇〇先生の研究した研究室で勉強してみたいとか、〇〇先生の講義を聞いてみたいといった動機もあろう。また逆にそうでない大学では、学問の内容よりも、他の面での特色がアピールをする場合もある。

そこで本研究では、学部が社会科学系（経済、経営）で、卒業生の進路が研究者ではなく、一般企業がほとんどという前提でこの問題を考える。

3.2 大学の位置づけは変わる

日本では、関東・関西を問わず、各地域毎に各私立大学の位置づけ（序列）としていろいろな言い方がある。しかし、この位置づけは未来永劫それが固定しているのではなく、各大学の努力の有無等及びその正否により、時間の経過と共に変化していく。戦後の変遷だけを見ても、この事は明白である。従って、仮に今の位置づけが良いところにあったと

しても、慢心していると企業社会と同じで、気が付いたときには位置づけが下がっていたり、逆に今の位置づけが不本意なものであっても、現状を正しく認識し、適切な戦略を取ればその位置づけは上がることになる。

3.3 どの大学も同じ戦略ではうまくいかない

従って、どの大学も同じようなことをしては、うまくいかないのは当然である。これは企業社会で例えて言う、いろいろな業種・企業があるにもかかわらず、同じ目標・同じ方法を掲げて走っても、少し想像すれば分かるように、そのようなことで全ての企業がうまくいくことなどあり得ないのと同じである。

また、仮に同じ業界であったとしても、同じ目標・同じ方法を掲げて走っても、全ての企業がうまくいくことなどあり得ないのも明らかである。例えば、トヨタとホンダはそれぞれ違う戦略で、それぞれ必死に頑張ることによって、お互いに存在感のある企業として存在できていることをみても分かる。

これと同じ事が大学にも言える。各大学の位置づけを考え特色を認識し、それらをうまく生かした経営戦略が必要である。

3.4 志望順位と大学の位置づけ

既に述べたように、本研究では、学部が社会科学系（経済、経営）で、卒業生の進路が研究者ではなく、一般企業がほとんどという想定でこの問題を考えることにする。この前提で考えるとすれば、志望順位は何によって決められるだろうか。

志望順位は大学の位置づけ（序列）とは本来同一ではないが、しかし全く別物というわけでもない。学部が社会科学系（経済、経営）で、卒業生の進路が研究者ではなく、一般企業がほとんどという想定であれば、どちらかといえば、志望順位と大学の位置づけ（序列）はほぼ関連していると予想できる。

4. 大学の評価（位置づけ・序列）はどこでされるか（評価する人は誰か）

ここで言う大学の位置づけ（序列）とは、公的なものではなく、何となく世間一般の認識というようなものである。いわば世間の評価といえる。世間の評価とは、これは一種のイメージで一見曖昧なもののようなのであるが、全く当てにならないかというところでもなく、何となく納得できるところがある。逆にそのようなところがなければ、このような評価が

存続する事は出来ない。

大学の位置づけ、評価に影響を与えるのは誰かを考えてみると、まず①学生本人、②学生の両親・親族、③当該大学の卒業生自身、④高校や予備校の教員・講師、⑤学生を採用する企業、⑥大学を知っているその他の人となる。

以下、各評価者からの評価についてそれぞれ具体的に見ていこう。

4.1 学生本人からの評価、高校や予備校の教員・講師からの評価

学生本人からの評価は、議論が難しい面がある。つまり、学生の望むことが必ずしも良いこととは言えない面があるからである。

例えば、卒業証書のみがあればよいというレベルの学生は、たいした勉強をしないでも単位を簡単に出す大学を良いと評価する可能性が高い。何も勉強していないにもかかわらず成績に優がついていれば、勉学意欲のない学生は、「何も勉強していないのに優をつけてくれる大学は楽で良いところだ」と考えるわけである。その学生が高校の教員や予備校の講師に会ったとき、「〇〇大学は楽だ」と言ったとすると、それを聞いた教員や講師は、その大学にはそのような学生を受験させればよいと判断する可能性が高い。もちろんそのような大学に対して社会が良い評価を与えないのは言うまでもない。しかし、逆に勉学意欲のあるまともな学生ならこれを喜ぶのではなく「いい加減な大学である」と評価する可能性が高い。そのような学生が高校の教員や予備校の講師に会ったとき、「勉強するつもりなら〇〇大学はあまり良くないと思う」と告げるであろう。

あるいは、試験の直前の授業で教員が、「〇〇についてよく勉強しておくように」といったことを漏らしたとする。これは教員が学生が単位を落とさないようにという気持ちで言うと思われるが、学生側から見ると、「〇〇先生の授業は最後の授業だけ出れば OK だ」となり、このようなことを言っている学生がその科目の単位を取れたり、優をもらったりすれば、その事実は学生の間でどんどん広がり、「〇〇先生の授業は普段は出席する必要が無く、最後に出れば十分」となってしまう、学生の学問レベルはどんどん低下していく。それに呼応するように授業のレベルも低下させざるを得ないという「負のスパイラル」が発生する。その学生が高校の教員や予備校の講師に会えば、「〇〇大学は楽だ」と言うことにつながるだろう。

従って、勉学意欲の低い学生をターゲットとして大学の経営をするのであれば話は別だが、そうでなければ、大学を良くするために（これは大学の評価のアップに繋がるが）、学生の授業に対する意見を聞くのであれば、勉学意欲のない学生の意見を聞くのではなく、

勉学意欲のある学生がどう評価しているかを聞くのが重要である。そのような学生が卒業時に「良い大学であった」「この大学にきて良かった」と感じて卒業して行くことが重要である。

4.2 両親・親族からの評価

両親・親族からの評価についても学生本人の評価と同様の問題点がある。つまり、両親や親族の望むことが必ずしも良いこととは言えない面があるからである。

例えば、世間で通用するのは単なる卒業証書ではなく、その学生が大学でどれだけ頑張ってきたかであるにもかかわらず、両親・親族が学生本人と同様な考え方で、卒業証書さえあれば何とかなると考えている場合がある。その場合には、学生が怠けた結果卒業できない場合であっても、卒業しにくいことが悪いことで、楽に卒業できることが良いことになってしまう。

また、両親・親族が大学というものの制度を良く理解していない場合に、大学に対して中学や高校のような面倒見の良さを期待していることがある。しかし、大学で、中学や高校の時のような面倒見をしていれば、いつまでたっても自立せず、責任感も芽生えず、精神的には幼いままですら社会に出ることになる。これは社会で自立できない学生を卒業させることである。その結果どうなるかと言えば、大学を卒業し社会に出れば、両親・親族の意向とは無関係に、社会の荒波にもまれる事となり、学生に自立してやっていく気構えがないと、とても持ちこたえられず、ギブアップしてしまい、社会から逃避してしまう可能性が高くなる。

従って、一律に面倒見を良くするのではなく、最終的には面倒を見られなくても、自分で考え、自分で行動し、責任も取る事が出来る人間に育てなければならない。そのためには面倒を見る割合を少しずつ減らしていくことが必要である。学生本人に勉学意欲があればそれに答えられるような制度を整え、それを学生に周知徹底した上で、段々と大人として独り立ちさせる事が大学として必要なことであり、そのようなことを出来る大学が良い大学といえる。大人として扱うということは、自由を与える代わりに、その結果については必ず責任を取らせるということでもある。独り立ちできない学生を卒業させることは、社会の荒波に持ちこたえられない学生を作り出すことになり、結果として両親・親族の大学に対する評価を落とすことになる。

従って、両親・親族が当該大学を良いと評価するには、①子供の成長が実感できる ②社会人として立派に自立できるようになった ③社会で今後も頑張っていけそうだ

と感じられることが必要である。

4.3 卒業生自身からの評価

大学時代によく勉強した学生が社会の荒波にもまれた時、大学を振り返ってどう思うかということである。よく言われることは、「社会は理屈通りに動かないから、大学で仮に学問を勉強したとしてもそれは役に立たない。従って勉強することは大した意味はないが卒業証書くらいはもらっておく必要がある。」という言い方である。これは「卒業証書さえもらえばよい」という考えにつながる。本心からそう思う人は、学生時代あまり勉強してこなかった人ではないだろうか。よくある話ではあるが、あることを知っている人にはある事象の中にその存在が見えるが、そうでない人にはそれがあること自体が見えない事はよくある。つまり頭の中にその考え方があれば、その問題が解決できることが分かるが、そうでなければ、解決できることさえ分からないということである。もし「大学で仮に学問を勉強したとしてもそれは実社会で役に立たない。」ことが本当にそうなら、学者になる人以外は学問をする必要はなくなる。しかし、本当にそうならないのは、よく言われるこの言葉が間違っているからである。

企業社会で活躍する人で、大学時代に勉強することに意味がないという人にはまずお目にかからない。あったとしても謙遜で言っているにすぎないことはすぐに分かる。逆に良く聞くのが「学生時代にもっと勉強しておけば良かった」という言葉である。誰であってのもこれで完璧という勉強は出来ないが、自分で苦勞して得たことは、何かの折りに必ず生きてくる。卒業生が何かの折りにそのような経験をしたとき、良い大学を卒業したと感じられるのではないだろうか。

実社会で役に立つというのは断片的な知識ではない。また大学時代の専門と違う仕事をしているから役に立たないという事でもない。逆に大学時代と同じ分野の仕事であっても、世の中はどんどん進むので大学時代の知識はそのままでは使えないであろう（基本的な原理はこれとは別であり、いつでも十分使える。その意味で基本は大切である。）。役に立つのはそれぞれの学問の考え方であり、考えるプロセスである。その考え方やプロセスが論理的、科学的である限りどのような実社会の問題であっても、その問題解決に使える。従って、基本的な原理を理屈も含めて理解し、論理的な考え方の訓練を行っておけば、その努力は大学卒業後も実社会の問題解決に役立てることが出来るのである。

4.4 企業からの評価

採用する企業は、大学の評価を以下のような場面で行う事が考えられる。

- ① 企業の採用担当者が大学を訪問したときに受ける学生の印象
- ② 応募してくる学生から受ける印象
- ③ 採用したにもかかわらず、すぐに退職する等の有無
- ④ 採用した新入社員の配属先の評判（仕事ぶり）

4.5 その他の人からの評価

上記以外の人が大学を評価する材料としては以下のようなことが考えられる。

- ① 通学途中の学生の話す内容・態度・マナーに接しての評価
- ② 自分の職場で、当該大学の卒業生を見ての評価
- ③ 仕事上の付き合いで知っている当該大学出身の他社社員への評価
- ④ 大学の近くに住んでいる人の当該大学学生への評価
- ⑤ マスコミに発表される当該大学の記事が評価に与える影響
- ⑥ アルバイトとして当該大学学生を雇っている人からの評価
- ⑦ 当該大学の学生が住んでいる近所にすむ人からの学生への評価

5. それぞれの評価者からの評価を高めるための方法

「4.」で述べた各評価者の評価を高めるにはどうすればよいかを、各評価者毎に考えてみよう。

5.1 学生本人からの評価、高校や予備校の教員・講師からの評価を高める方法

これらの評価者からの評価を高めるには以下の方法が考えられる。

- ① 勉学意欲のある学生が、「大学が真面目に大学としての授業を行っている」と評価でき、「後輩に入学を勧める事が出来る」授業とする。
- ② 勉学意欲のある学生が「努力すれば」、十分ついて行ける授業とする。

努力してもついて行けない授業は論外であるが、努力しなくてもよい授業も問題である。

努力しなくてもついて行ける授業はこのような学生には物足りない授業であり、反って、将来伸びる学生をスポイルすることに繋がる。努力する経験をさせることが将来

社会で活躍出来る学生をつくる。

- ③ 基本事項については、覚えることを教えるのではなく、理屈を理解させてその考え方を使えるような教育をする。それには学生の努力が必要であり、学生にとって「少々しんどい授業」である必要がある。しかし逆に理屈を理解すれば、授業が面白くなるので事態はよい方向に進むといえる。
- ④ 勉強意欲のない学生や、真面目に取り組まない学生を合格させない授業とする。このような学生を合格させると、教員や学問を、更には、大学や社会をなめる学生となり、真摯な姿勢が欠けたままとなる。これでは、社会での活躍は難しい。

5.2 両親・親族からの評価を高める方法

これらの評価者からの評価を高めるには以下の方法が考えられる。

- ① 大学では、学生が精神的に子供の状態から、責任を負える大人に移行して、大人として自立するための指導を行う事が必要となる。自立とは自分でよく考え、行動し、その結果は全て自分で責任を負うことである。これはすぐには無理で、段階を重ねていく事が必要である。

まず1年生では、精神的に大人への移行をしなければならないことを認識させる。現在多くの大学で1年生のゼミを実施しているが、1年生のゼミのような制度をうまく利用するのも一つの方法といえる。これは口で言うだけではだめで、実行を伴わせる事が必要である。これは一種の面倒見を良くすることであるが、これは真面目にやっていない学生も適当な理由をつけて何とか合格させるような面倒見の良さではなく、真面目にすれば必ず出来ることを十分説明の上、真面目にすれば必ず出来るレベルを設定し、真面目にやらずそのレベルをクリアできなかった学生を「不合格」とすることである。だれでも真面目にすれば必ず出来るレベルとは例えば、欠席や遅刻の回数の制限、提出物の提出期限の設定、提出物は他人のコピーは不可といったことである。

このようにせず、「1年生だからレベルに少し足りないが、落とすとかわいそうだから……」と考えると、後でその学生が自分の問題点に気づく可能性は少ない。これは、「適当にしていっても後で何とかなる」ということを保証し、確信させてしているのと同じであり、「正式のシラバスにはこのように記載され、教員もこう言っているが、真面目にしなくても何とかなる」ということを明示しているのと同じである。これでは、高を括る学生が増えることになり、教育効果は低下する。

- ② このような規律を守らせることが、逆に自分で自分をコントロールできる学生をつ

くることにつながる。

5.3 卒業生自身からの評価を高める方法

これらの評価者からの評価を高めるには以下の方法が考えられる。

- ① 大学時代に自分で苦勞して得たことが、仕事の何かの折りにそれが役立ったという経験をすれば「よい大学を出た」と実感できる。実はこれは稀なことではなく、どちらかというによく経験することである。これは学生時代に、理屈を理解するという勉強方法を実行していると、論理的思考法が身に付き、その能力があらゆるところで使えるからである。「世の中は理屈通りには……」という台詞はよく使われるが、逆に理屈なしでは誰も説得できない。更に言えば、何事も理屈通りには行かないが、理屈がないと何も動かないのである。その意味で論理的思考は重要である。従って学生時代には学生それぞれに「苦勞」をしてもらう必要がある。そのためには「5.1」で述べたように、学生にとっては「優しい授業」ではなく、「少々しんどい授業」が必要である。
- ② 論理的思考が出来るようにするには「丸暗記」ではなく、理屈を理解する「授業」と「勉強」が必要である。このためには、基本的な内容の項目では、必ず考え方をよく説明し、勉強意欲がある学生が理解できるような工夫が必要で、考え方を理解せず丸暗記では合格できないし、そのような勉強方法では、せっかく勉強した学問が将来役に立たないことを明言しておくことも必要となる。このような基礎的な内容は多かれ少なかれ全ての科目にあるので、これを実行すれば、いろいろな科目で論理的思考の訓練が可能となる。
- ③ 大学がマスコミでどう報道されるかについては、自分の出身学部でなくても、よい研究成果を上げたことがマスコミ等に報道されると卒業生は誇らしく感じるものである。従って、各大学の研究者がよい研究をすることに尽きる。

5.4 企業からの評価を高める方法

これらの評価者からの評価を高めるには以下の方法が考えられる。

- ① 企業の担当者が大学を訪れたときの印象は、飾っていない状態の学生が企業人にどのような印象を与えるかである。

具体的には、少々細くなりすぎる嫌いがあるが

- a. 学生のマナーを向上させる。例えば歩行喫煙やゴミの投げ捨ては言うまでもない。

来客者に対するエチケットも大切であり、それを実行させるような対策が必要である。

b. 友人同士で話す内容も重要である。話していることは誰が聞いているか分からないことも認識させる必要がある。

- ② 就職に応募するときの最低限必要な心得を理解させておく必要がある。心得のない学生が面接を受けると、企業が当該大学に悪い印象を持ってしまうからである。
- ③ 就職したにもかかわらず、すぐに簡単にやめるのは相手企業だけでなく、他人に多大な迷惑をかけることを認識させ、そうならないように、自分の研究と、企業研究をする重要性をよく理解させておく。
- ④ マナー、一般常識は言うに及ばず、企業人として必要な心構えを理解させておく。

5.5 その他の人からの評価を高める方法

これらの評価者からの評価を高めるには以下の方法が考えられる。

- ① 通学途中に話す内容・態度・マナーについては、マナー・一般常識の問題である。（学生の住む地域の人からの評価も同様である。）
- ② 学生の住む近くの人に与える印象は、マナー・一般常識の問題である。
- ③ マスコミに発表される当該大学の記事が一般の人に与える影響は言うまでもなく大きい。当該大学の研究者は立派な研究をすべく努力することである。
- ④ アルバイトとして働いている場合の評価は、マナー・一般常識、企業人としての心構えの問題である。

6. 「評価を高めるための方法」の再構成

「5.」で述べた各評価者毎の評価を高めるための方法を、関連する項目毎に再構成すると以下ようになる。

6.1 「マナー、一般常識」に関して各評価者の評価を高めるための方法

- ① マナーや一般常識を理解させ守らせる。そのための仕組み、方法を考えて実行する。
- ② 少なくとも、学内でのマナー違反（ゴミの散らかしや歩行喫煙等）は認めない仕組みが必要である。

6.2 「大学生としての心構え」に関して各評価者の評価を高めるための方法

- ① 大学在学中に、精神的な面で、子供から大人に移行しなければならないという意識を持たせる。このために授業や試験での規律を守らせることは当然であるが、授業時間以外でも、また大学外でも、一般常識やマナーを守る行動を実践させる。
- ② 「いい加減」は世の中では通用しないことを明確に認識させるため、自己責任の原則を守らせる。そのため、まずは授業で不真面目な受講学生で一定レベルに達しない学生は当たり前のことであるが不合格とする。そのためには普段から小テスト等で学習態度を見ておく必要がある。

6.3 「授業」に関して各評価者の評価を高めるための方法

- ① 学生にとって「優しい授業」「楽な授業」ではなく、学生のレベルに合った「少々しんどい授業」とする。
- ② 勉学意欲のある学生が真面目にやればできる最低レベルを設定し、真面目にやればできることを説明する。また勉強方法も説明し、真面目に頑張る学生には勉強しやすく分かる授業とする。
しかし勉学意欲が無く真面目に勉強しない場合には、最低レベルに達せず合格できない事を最初に周知徹底した上、それにもかかわらず、そのレベルに達しない学生は不合格とする。
- ③ 基本的な事項については、丸暗記をさせず、理屈を理解させる授業とし、難しくはないが基本的なことが理解されていないと合格出来ない試験とする。理屈が理解できて初めてその考え方が実社会で使えるようになり、また、勉強するおもしろさも理解できる。

6.4 「社会人としての常識」に関して各評価者の評価を高めるための方法

- ① 社会人の常識は、学生の常識とは違うことを明確に理解させておく必要がある。
違いはいろいろあり、ここで全てをあげるつもりはないが、大きな違いは、組織内では権限と責任は表裏一体で、誰でも同じ事は出来ないということである。地位により出来ることは決まっており、地位が高いほど自由度が高くなる。そういう意味では、組織内では誰も同じ権限を持つわけではない。自由度を上げたければ上位資格に昇進するしかない。

また、意思決定は多数決で決めることも無いとは言えないが、多くの場合は十分議

論はするが、最終的には責任を持つ人が決定する。従って、上位者は自由に決定する権限を持つが、その結果については責任を負うことになる。またいい加減な決定は本人だけで無く組織全体に多大な問題を引き起こす事になるので、「意思決定」の問題は地位が上になればなるほど重要性を帯びる。

- ② 一言で言えば、社会に出れば、「適当に」とか「いい加減」は許されない。この事を考えると、学生のうちに、このような世界に入れるような訓練をしていく必要がある。それは例えば、授業で課題の提出期限を厳格に管理するとか、他人の内容をコピーしたレポートはマイナス評価にするとか、いい加減な受講態度の学生は「不合格」となる等の事を通して学生に学習させる事である。
- ③ しかし一方、大学における勉強が「社会人としての常識」に大いに役立つと言うこともある。例えば上記①で述べた「意思決定」の問題に付いては理論がある。筆者の専門である「経営科学」はそのような事象について考え実践する学問である。そのような理論をわきまえている人と、わきまえていない人では、意思決定の質が大きく違う。例えて言えば、素人が手術を行う場合と、まともな医者が手術を行う場合の差くらいは出る。このことは既に「4.3」でも述べたが、知っていなければ分からないことである。同様のことは、他の科目についても言える。これは、「大学での学問と社会に出てからの事は関係ない」という言い方が間違っている事の一つの証明でもある。

6.5 「研究」に関して各評価者の評価を高めるための方法

「研究」が各評価者の評価を高めるためには、言うまでもなく、当該大学の研究者が良い研究が出来るよう励むことである。

以上の議論を簡単にまとめると次の表のようになる。

表1 大学を評価する評価者と評価を高める方法との関係

評価者↓	評価者がよいと思う状況	評価を高める方法	分野
学生本人	勉学意欲のある学生が、卒業時によい大学だったと思えること	真面目に大学としての授業を行う	授業
		勉学意欲のある学生が「努力すれば」、十分ついて行ける授業を行う	授業
		基本事項については、覚えることを教えるのではなく、理屈を理解させて、その考え方を伝えるような教育を行う	授業
		学生にとって「少々しんどい授業」を行う	授業
		勉学意欲のない学生や、真面目に取り組まない学生を合格させない授業とする	授業
学生の両親・親族	大学が適切な面倒見をして、卒業時に社会で自立できる状態になっていること	1年生で、精神的に大人への移行をしなければならないことを認識させる。	大学生としての心構え
		授業では真面目にすれば必ず出来るレベルを設定し、真面目にやれば必ず出来ることを十分説明し、真面目にやらずにそのレベルをクリアできなかった学生を「不合格」にする。その際には落ちればかわいそうだという発想はしない。	授業
		規律を守らせる（これが、逆に自分で自分をコントロールできる学生をつくる）	授業／大学生としての心構え／マナー、一般常識
当該大学の卒業生自身	卒業生が、何かの折りに大学で苦勞したことが、仕事や社会で役立ったとき、良い大学を卒業したと感じる	論理的思考を身につけさせる事が必要。そのためには「丸暗記」ではなく、理屈を理解する「授業」と学生の努力が必要だが、努力をせざるを得ない環境に学生をおく	授業
	マスコミに、出身大学の良い研究成果が発表されるのを見ると、学部は違っても誇らしい気持ちになる	当該大学の研究者がよい研究をする	研究
高校や予備校の教員・講師	高校や予備校の卒業生が、それらの教員や講師に、少々しんどいが良い大学であり、充実していると報告してきたとき	「学生本人」からの評価を高める方法と同じ	授業
学生を採用する企業	企業の採用担当者が大学を訪問したときに学生の言動や態度を見て好感を持つ	学生のマナーや一般常識を理解させ実行させる	マナー、一般常識
	応募してくる学生から意欲のある真面目さが感じられる	社会に出るための心得を体得させる	社会人としての常識／大学生としての心構え／マナー、一般常識
	採用した学生が、すぐに退職することがない	自分の研究と企業研究を十分行わせる。また、社会に出れば、何でもすぐには自分の思い通りにはならないことも理解させる。	社会人としての常識
	採用した新入社員の配属先の評判（仕事ぶり）が良い	マナー、一般常識は言うに及ばず、社会人として必要な心構えを理解、体得させておく。	社会人としての常識
大学を知っているその他の人	通学途中の学生の言動・態度に好感を持つ	マナー・一般常識を体得させる	マナー、一般常識
	職場にきた当該大学の卒業生を見て良くやっていると感じる	マナー、一般常識は言うに及ばず、企業人として必要な心構えを理解、体得させておく。	マナー、一般常識／社会人としての常識
	当該大学出身の他社社員を見て良い社員と感じる	マナー、一般常識は言うに及ばず、企業人として必要な心構えを理解、体得させておく。	マナー、一般常識／社会人としての常識
	当該大学の近くに住んでいる人が学生の態度や言動に好感を持つ	マナー・一般常識を体得させる	マナー、一般常識
	マスコミに発表される当該大学の記事を読み良い評価をする	当該大学の研究者がよい研究をする	研究
	アルバイトとして当該大学学生を雇っている人が、アルバイトの働きぶりに対して良い評価をする	マナー、一般常識は言うに及ばず、企業人として必要な心構えを理解、体得させておく。	マナー、一般常識／社会人としての常識
	当該大学の学生が住む近所にすむ人が、その学生を良く評価する	マナー・一般常識を体得させる	マナー、一般常識

7. 結 論 と 考 察

- (1) 本研究では、学部が社会科学系（経済，経営）で、卒業生の進路が研究者ではなく、一般企業がほとんどという前提で、私立大学における入学試験において成績上位者の入試手続き率向上を実現するためにはどうすべきかという視点から、問題の分析を行った。ここで述べた方法は大枠であり、詳細な具体策は各大学の事情を勘案して立案実施すればよい。
- (2) 複数の大学に合格した場合、どの大学に入学するかを決める要因は、合格した大学の中に、最初考えていた志望大学が入っていればその順番となることがほとんどであろう事が予想される。従って、各大学は、志望順位の上位に自分の大学がくるようにするにはどうすべきかということになる。

志望順位は大学の位置づけ（序列）とは本来同一ではないが、しかし全く別物というわけでもない。この研究の前提条件では、どちらかといえば、志望順位と大学の位置づけ（序列）はほぼ関連していると予想できる。なお、大学の位置づけ（序列）とは、一種のイメージで一見曖昧なものようであるが、全く当てにならないかということでもなく、何となく納得できるところがある。

そこで、大学の位置づけ、評価に影響を与える評価者が誰かを考え、それらの評価者は何を良いと判断するかを考察した。次にその評価を高める方法を考察し、それらを別の視点から再構成した。

- (3) この方法を実施すれば、勉学意欲のある学生に対して十分なレベルアップが予想され、本研究で分類した「各評価者」から良い評価を得られる可能性がある。その結果、大学の位置づけ（序列）が上がる事が予想される。
- (4) しかし、問題もある。それはどの大学でも存在する（大学によってその割合は異なるが）勉学意欲が認められない入学者である。このような学生の割合が高ければ、ここで提案するような方法の実施は難しくなる。本来大学は勉学意欲のある学生が志望して入るものであり、勉学意欲が認められない入学者はあり得ないはずだが、入学定員と大学志望者数の関係から入学してしまう可能性が高まっている。しかし、これは国の教育行政の問題であり、各大学が関与できる問題ではないので、ここではこれ以上議論しない事にする。

また、学習意欲のない学生をどのように導くかは、重要ではあるが、本来の大学と

は違う次元の問題であり、ここでは議論しない。

- (5) もう一つの問題は、ここで提案したようなことを実施しようとする、少なくとも教員は学生の学習状況を把握しておく必要がある。具体的に言えば、小テストを複数回実施し、その都度採点をし、その点数を全て把握するといったことが必要になる。学生の学習状況を把握しておけば真面目に学習しているかどうかは一目瞭然であるが労力がかかることは間違いない。
- (6) ここで述べた「評価を高める方法」は全く独立した事象ではなく、他の項目と何らかの関連性が認められる。そのため、「A」を実施すれば「C」に影響を与えるとやったことが起こる。このような分析を行えば、ここで取り上げた問題の構造を知ることが出来ると考えられるが、別の機会としたい。
- (7) この研究では、よく議論にのぼる偏差値については触れなかったが、その理由は、大学の位置づけ・序列が上がり志望者が増えると、偏差値は自動的に上がるためである。

参 考 文 献

- 〔1〕 大村雄史，私立大学入試における合格最低点決定問題，商経学叢，Vol. 52 No.2，平成17年12月
- 〔2〕 大村雄史，私立大学入試における合格最低点決定モデルの感度分析，生駒経済論叢，Vol 3, No. 3, 平成18年3月
- 〔3〕 大村雄史，私立大学入試における合格最低点決定モデルのリスク分析，生駒経済論叢，Vol 4, No. 2, 平成18年9月
- 〔4〕 宇佐見寛，大学の授業，東信堂，2005年
- 〔5〕 宇佐見寛，大学授業の病理，東信堂，2005年
- 〔6〕 宇佐見寛，大学授業入門，東信堂，2007年